ikiiki-tsushin

左京東部 いきいき通信

June.2021 Vol.15

多文化共生 特集

People

多文化共生とは -----
「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的な違いを認め、対等な関係を築こうとしながら、共に生きていくこと」

過去の多文化共生事業の風景

事業紹介

今回は左京東部いきいき市民活動センターの多文化共生事業ということで、さまざまな国の生まれの方に集まっていただきました。それぞれ違う文化を持った人々が一緒に暮らしていくにはどうすればよいのでしょうか。今回はそんなテーマのなかから「日本で暮らすなかで抱える悩みごとや困りごと」をピックアップしてご紹介します。

■暮らしのなかにある音の問題

外国人のNさん
日本のルールを守って生活しているのに注意されます。本当にうるさいのか、外国人だから嫌われてるのかがわからないときがあります。

日本人のAさん
昔は音に関してこんなに問題になることはおそらくありませんでした。世の中全体が音に敏感になったというか。外国人に対してクレームをつけたいわけではないと思います。
極端な話、自分の家族が出す音は気にならないけど、他人の出した音は気になるんですね。共同体が薄れた結果、同じ音でも気になる場合と、そうでない場合がある。

外国人のNさん
私はマンションに住んでいるんですけど、問題が起きるとマンション全体に紙が回ってきます。でも、「戸を静かに閉めてください」という内容の場合、どのくらい気を付ければいいのかわかりません。
例えば、「早朝に洗濯機を回さないで」と書かれていても、早朝が何時から何時までかはわかりません。インターネットで調べたり日本人の方に聞いたりしても、はっきりとはわからないんです。「これを守っておけば大丈夫」っていう明確なルールがなくて困ります。

←←↑過去の多文化共生事業の風景

日本人のMさん
たぶん明確なルールはないんだと思います。日本人もルールを隠しているわけはなくて、明確なルールがないから教えられない。
それと周りにどういう人が住んでいるかでルールも変化する気がして。例えば、家族世帯の多いマンションと、学生ばかりのマンションではなんとなく違う。ただ、実際にルールがあるわけではなく、なんとなくの感覚でしかないと思います。

■明確なルールがないことに良い面もある？

日本人のMさん
明確なルールを決めることによって窮屈になる部分もあると思うんです。例えば、朝10時から夜10時までしか音を出せないとルールで決めてしまうと、仕事の都合で夜10時以降にならないと帰ってこれない人は洗濯も何もできなくなってしまう。そういう窮屈さを避けたりしてる部分はあると思うんですね。

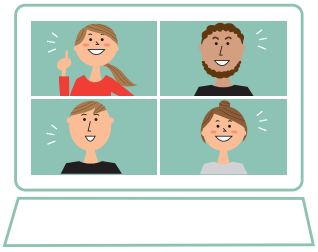
日本人のAさん
それが日本人の暮らしてきたひとつの生活様式だと思います。決めないでなんとなく曖昧にしてきた。昭和くらいまではそれで十分通用してきたんだと思います。それがだんだん時代に合わなくなってきた。

■明確なルールは必要？

日本人のMさん
明確なルールがあったほうがいいと思いますか？

外国人のNさん
ルールを決めるには法律の話しや「なぜそういうルールが必要か」という根拠などが必要になると思います。だから、ルールを決めて全員が従うというより、問題があったときに当事者同士で直接話し合って解決する方法がいいんじゃないでしょうか。そうすれば、問題がある点だけを改善できるし、余計なルールを増やす必要はなくなります。

日本人のMさん
私は外国人の方も含めて、新しい「なんとなく」を決めたらいいと思います。日本人だけに通じる「なんとなく」だから困るわけで。明確にルールを作るのではなく、みんな含めた「なんとなく」を作り直せばいいのではないでしょうか。


今回は Zoom を利用して事業を行いました。

■感想

Oさん
こういう分野に興味を持っている日本の方と話せてよかったです！私にとって、日本は故郷のような存在になっています。自分の経験を通じて、たくさんの人を助けていきたいと思っています。

Nさん
日本文化の曖昧さ、ルールがはっきりしない点には良い面もあると教えてもらえました。大変よい経験でした。もっと多くの人にこのようなイベントに参加してもらいたいです。またぜひ開催してください。

Yさん
今回のテーマは重かったですが、個人的にはよかったと思っています。文化の違いやお互いのことを知らないために、日常のなかではトラブルが起こってしまいます。お互いの違いを認め合えれば、面白い出会いになると感じた次第です。

編集：市川剛史

Topic 1 「わたしが 100 歳になったら」

みなさん「老い」について、どういうイメージを持っているでしょうか。改めて問われると戸惑う人も少なくないと思います。私もそうでした。あるいは多くの場合、身体に支障をきたし、したいことができなくなるなどといったネガティブなイメージを持っていることでしょう。今回私たちは、国籍問わず日本で生活をしている老若男女４８人にインタビューを行い、自分が１００歳になったときのことを想像し、語ってもらいました。その内容をまとめた展示会の開催と冊子の作成をいたしました。

少なくない方が、進行する高齢化や今後の福祉政策などの社会的な不安を口にしていたように思います。ただ同時に、いきいきと生きていたいという願いは共有されていました。一人ひとりがインタビューを通じて身の回りの未来について具体的にイメージを持つことで、どうしていけばその願いが可能になるか、考えるきっかけになっていったように思います。

冊子の残部には余裕がありますので、お手にとってご覧いただけると幸いです。各々が抱いている様々なイメージを共有し、それぞれを取り巻く諸問題にみんなで取り組んでいこうとする営みも、恐らく重要ですから。（渡辺）

Topic 2 「今年度の事業予定」

今年も様々な事業を実施予定です。

今回の特集にもなっている多文化共生関連の事業をはじめ、センター利用者の皆さんとのワークショップ事業を行う予定です。

また、残念ながら今年も盆踊り大会の開催はできませんが、集会室を利用した文化祭事業をおこなう予定です。

◎ 市民活動の活性化と多様な交流の成果を高めるためのワークショップ

◎ 皆が幸せな多文化共生社会を推進する事業

◎ Web 配信型文化祭

Topic 3 コラム『多文化を知ること、受け入れること』 センター長　杉山準

以前このコラムで『共生を社会の力に』と題して、多文化と共生することで、社会がよりよくなっていくことを期待する文章を書きました。あれからおよそ２年。当センターでの外国人利用者の増加や、新聞等の記事を見ても多文化社会は進んでいるように感じます。当センターでも多文化共生をテーマに、外国籍市民の方と意見交換する事業を一昨年度から４回実施してきました。おこなってみて感じたことは、互いにまだ知らないことがたくさんあるということです。日常の些細なことについても「文化」が異なると理解し合えない。この事業では「話してみること」の大切さがわかりました。話してみて初めて当たり前が当たり前でないことに気づきます。共生は、日本人にとっての当たり前を日本人の側が「当たり前」と感じていない方に、一方的に受け入れを強いることでは進展しないように感じます。それがたとえ無意識であっても無自覚であっても同様です。私たちも、他の文化背景を持つ方との対話を通じて、自分たちの「当たり前」を自覚することから始めなければいけないのかもしれません。

『前衛芸術ショー』本番風景（撮影：草本利枝）

NPO 劇研の事業として行った『ネルケンライン』練習風景

左京東部いきいき市民活動センター

〒606-8432 京都府京都市左京区鹿ケ谷高岸町 3-2
TEL：075-761-1385　FAX：075-752-3350
MAIL：info@se-ikiiki.com　URL：http://gekken.net/SE_IKIIKI/
開館時間：10 時～21 時（日曜日は 17 時まで）　休館日：火曜日・年末年始（12/29 ～ 1/4）
アクセス：京都市営地下鉄　蹴上駅より徒歩 15 分　バス停「東天王町」より徒歩 5 分
※駐車場はございませんので、公共交通機関もしくは最寄りのコインパーキングをご利用ください。

発行：左京東部いきいき市民活動センター　　発行日：令和３年６月 15 日
編集長：沢大洋